

「学生による授業評価」のまとめ 2008 年度春学期刊行にあたって

南山大学ファカルティ・ディベロップメント (FD) 委員会
委員長 神谷 俊次

2008 年度春学期の「学生による授業評価」(以下、授業評価)は、2008 年 6 月から 7 月にかけて実施されました。ご協力いただいた皆さんに心よりお礼申し上げます。

今学期も、これまでと同様に、専任・非常勤にかかわらず、1 教員 1 科目を授業評価の対象としました。これは、すべての教員が授業評価を毎学期実施することと、学生および教員に過大な負担が掛からないように配慮しているためです。評価対象科目の選出ルール等の詳細につきましては、教員向けの FD 関連 Web ページに掲載されていますので、そちらをご覧ください。なお、授業評価結果の概要につきましても同 Web ページで開示しています。

1 授業評価の実施方法

対象科目 各教員につき、それぞれの担当科目のうち 1 科目が選ばれ、名古屋・瀬戸の両キャンパスで 558 科目が授業評価の対象となりました。

設問項目 設問は 18 個あります。ただし、実際の授業評価用紙(マークシート)には 21 番までの番号が印刷されています。これは、JABEE(日本技術者教育認定機構)申請委員会が指定する科目用に追加されたものです。設問 1 から 3 までは、学生の授業参加(出席、予習復習など)を問う内容です。4 番から 18 番は、教員の授業運営や授業全体に関して問う設問になっています。また、裏面は自由記述欄になっています。

実施・回収手順 授業評価の実施には教員が立ち会いますが、匿名性の観点から、受講生の代表者が授業評価用紙を回収し、事務担当部署に提出する方式を採っています。

作業手順 授業評価の実施(2008 年 6~7 月) 集計作業 FD 委員会による自由記述欄の閲覧(7~8 月) 教員への集計結果の通知(7 月)
教員からの報告書提出(8~9 月) FD 委員会での結果の分析・検討(9~10 月) 「南山大学『学生による授業評価』のまとめ 2008 年度春学期」の発行(11 月)

2 集計結果の概要（2008年10月14日現在）

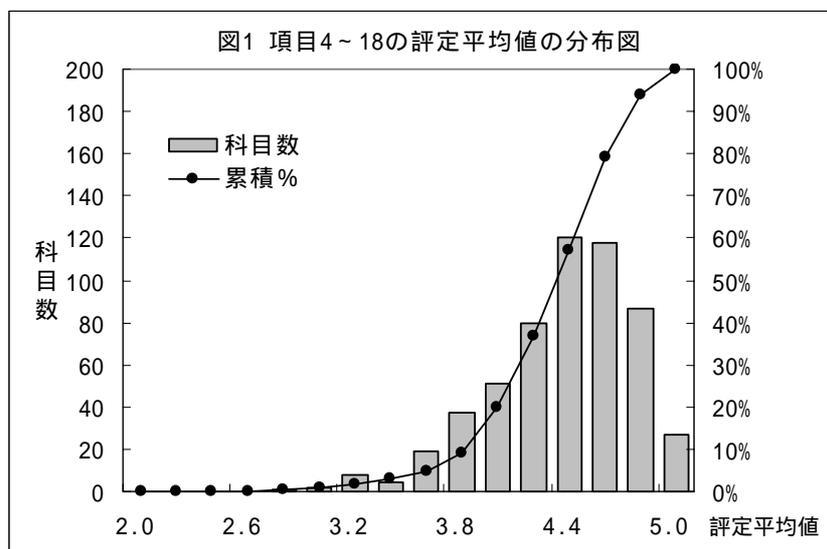
結果の概要は、括弧つきの頁部分に記載されています。

実施率 大学全体では、授業評価の実施率は99.8%（557 / 558 科目）でした。キャンパス別にみると、名古屋99.8%（436 / 437 科目）、瀬戸100.0%（121 / 121 科目）でした。

報告書提出率 大学全体では、報告書の提出率は100.0%（558 / 558 科目）でした。名古屋100.0%（437 / 437 科目）、瀬戸100.0%（121 / 121 科目）です。

評定平均値 設問1から3までの学生の授業参加を問う項目と設問4以降の教員の授業運営や授業全体に関する項目は、性質が異なりますので、2種類の平均値を算出しています。電算処理が行われた554科目の1番から18番までの項目全体の平均値は、4.11でした。また、受講生の授業参加姿勢に関する項目を除いた4番から18番の平均値は4.18でした。この平均値について分布の様子を図1に示しました。

電算処理実施科目の64%（352科目）が評定平均4.2以上となっています。また、評定平均4.0以上とすると、78%（432科目）が該当します。全体としては、満足のいく結果といえるでしょう。今学期の授業評価では、4番から18番の評定平均値が3.0未満であった科目は3件でした。当該科目の授業担当者には、授業改善方策の検討を別途お願いしました。



どんなに高い評価を受けた授業でも、一部の受講生からは厳しい見方がされています。個々の受講生の評定値よりも、クラス全体としての評価が重要と考えますので、すべての設問について評定平均値の分布の様子を図2-1から図2-18に示しました。

図2-1 授業への出席

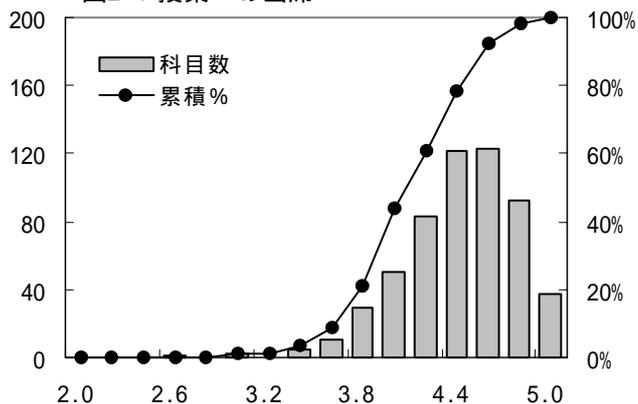


図2-2 私語などせずに授業に取り組んだ

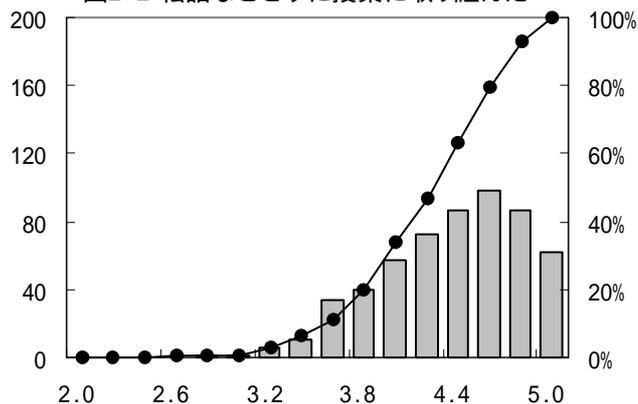


図2-3 予習や復習など自主的な学習の実行

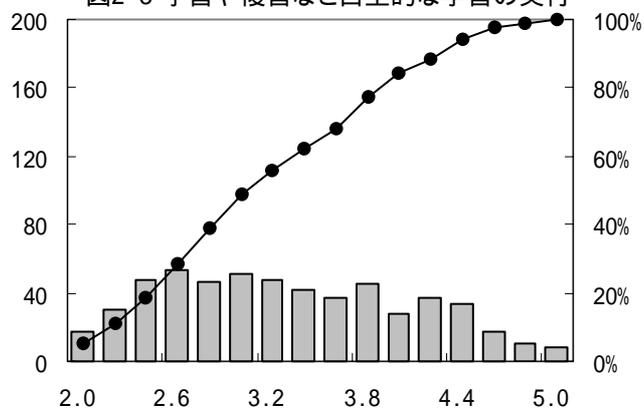


図2-4 授業時間の厳守

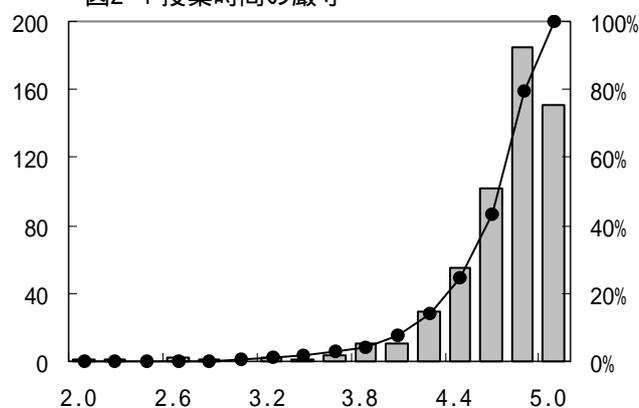


図2-5 授業の構成や進行速度が適切

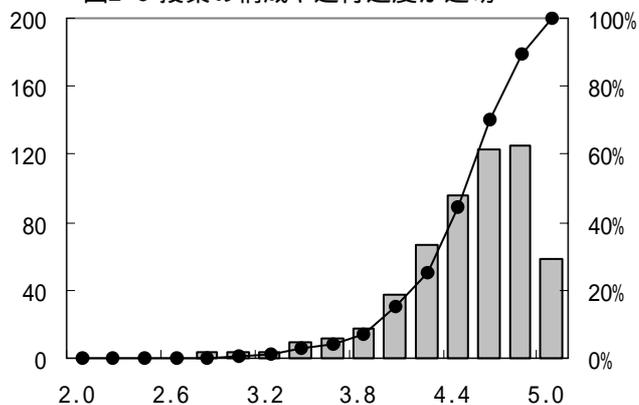


図2-6 学修目標の明示

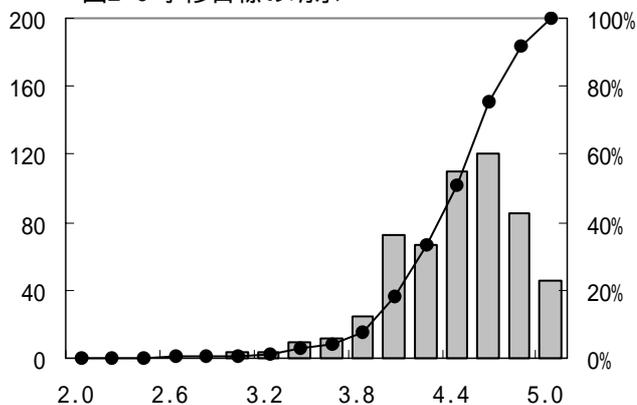


図2-7 シラバスの有用性

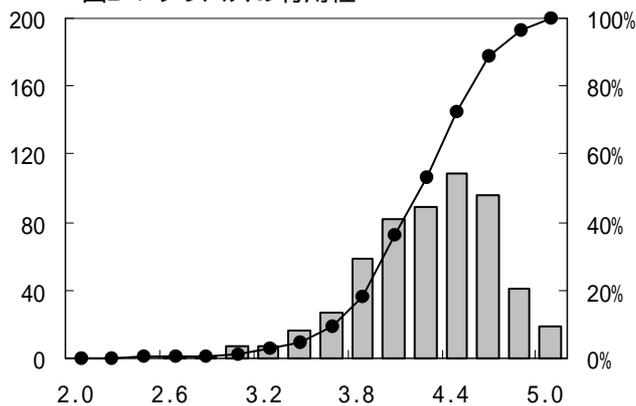


図2-8 教員の声

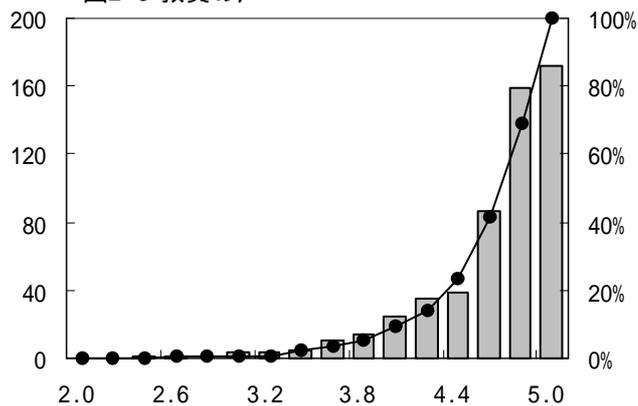


図2-9 学生の理解度に配慮した授業の進め方

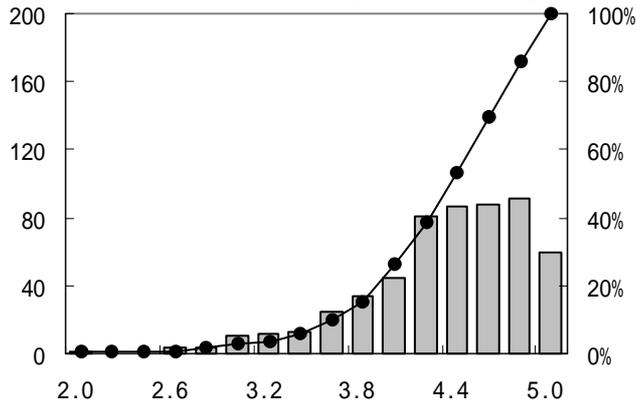


図2-10 授業の妨げになる行為に適切な対処

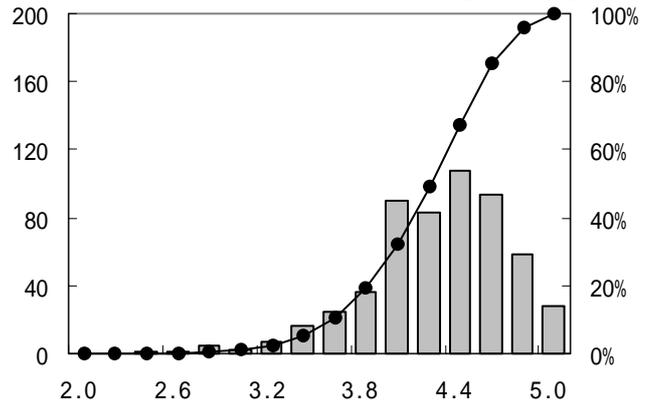


図2-11 教科書、板書、配布資料などの効果性

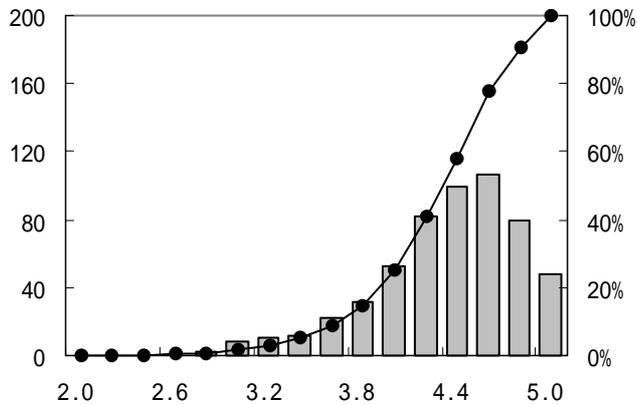


図2-12 学生の学習意欲を引き出す工夫

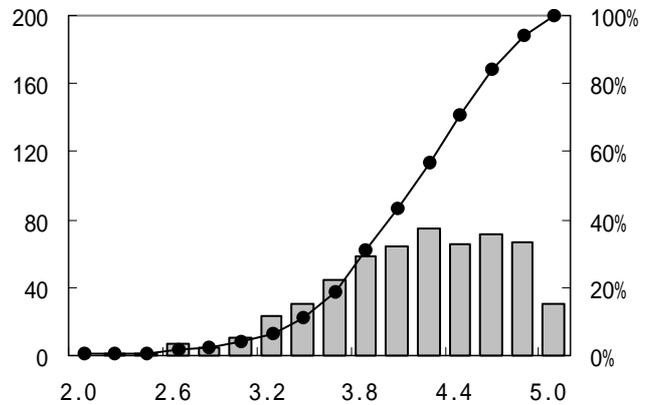


図2-13 自主的学習のための指導・情報提供

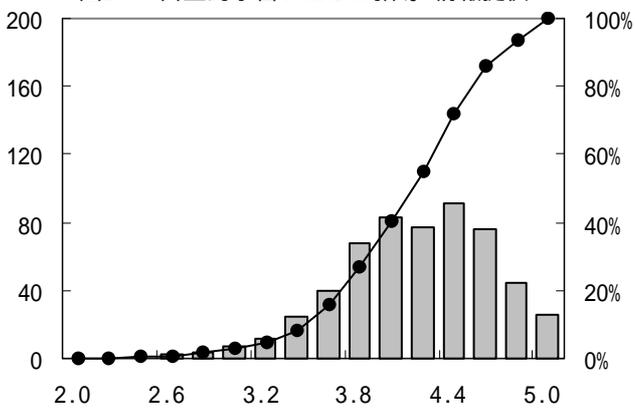


図2-14 質問や相談の機会

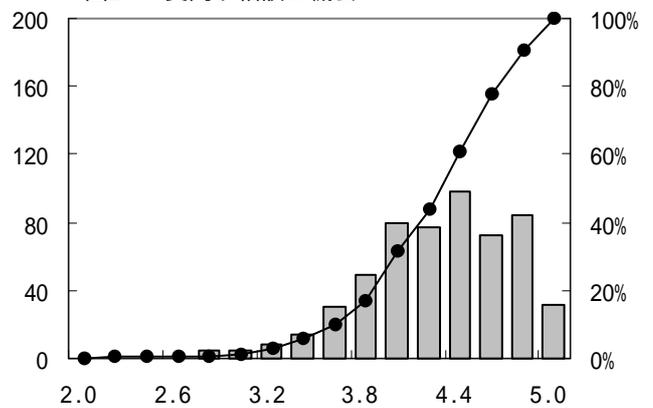


図2-15 担当教員の姿勢の誠実さ、真剣さ

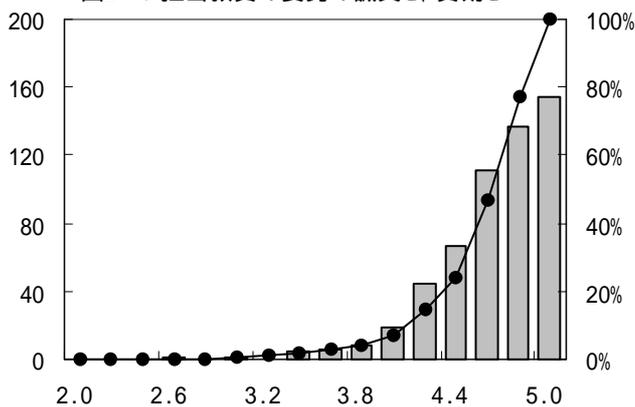


図2-16 授業に関連する内容へのさらなる興味

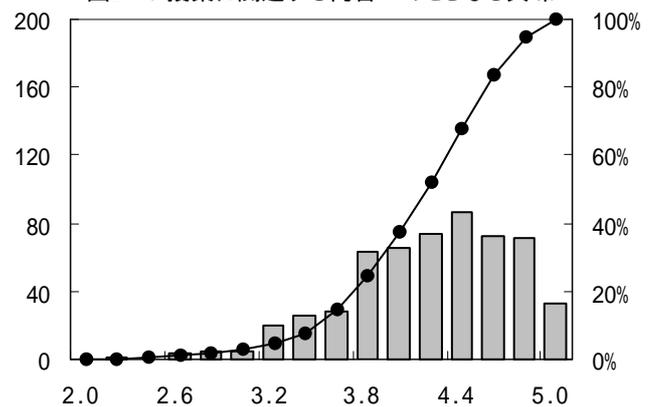


図2-17 新しい知識や理解の深まり

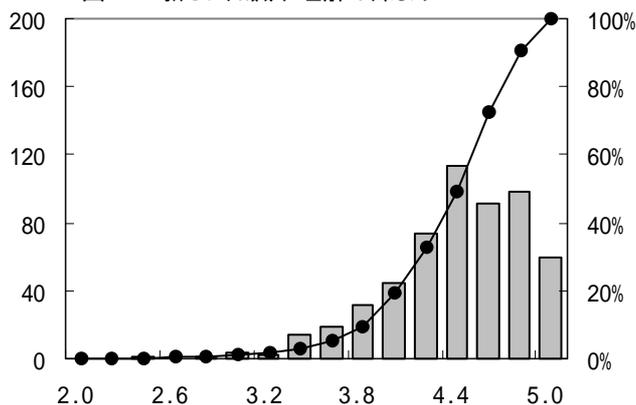
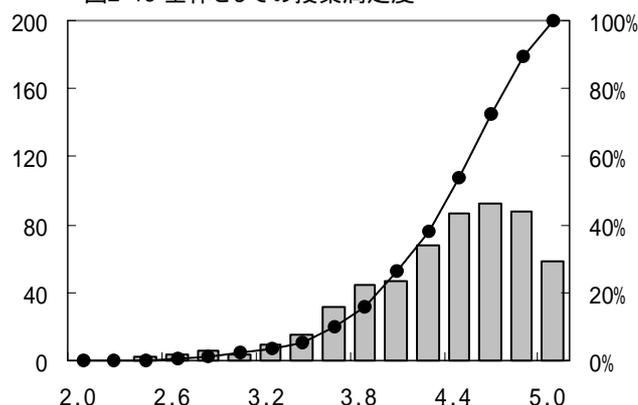


図2-18 全体としての授業満足度



大学全体の平均が 4.5 前後の設問は、4 番（授業の開始と終了の時間はきちんと守られていましたか）、8 番（教員の声や音声機器の音はよく聞き取れましたか）、15 番（担当教員の授業に取り組む姿勢に誠実さ、真剣さを感じることができましたか）でした。とくに、15 番の評定が高い点は特筆すべき長所で、南山大学の教員が授業に真剣に取り組んでいることが窺えます。

受講生の授業への取り組み姿勢は、例年に比べ高い評価となっています。最近、始業時間を守らない教員に対する苦情が増えていますが、授業に真面目に取り組もうとする受講生の意識が反映されているものと思われます。

設問 18（全体として、あなたはこの授業に満足しましたか）は、授業評価項目の見直しがあっても一貫して設定されてきた重要な項目です。4 点以上の評価を受けた科目数は 7 割を超えており（電算処理実施科目の平均は 4.11）、全体としては、満足しているという意見が多いといえます。その一方で、設問 18 で 3 点未満の評価を受けている科目が 14 科目ありました。前学期に引き続き、これらの科目の授業担当者に対しても、授業運営に問題点がないか検討をお願いし、授業改善方策報告書の提出を求めました。

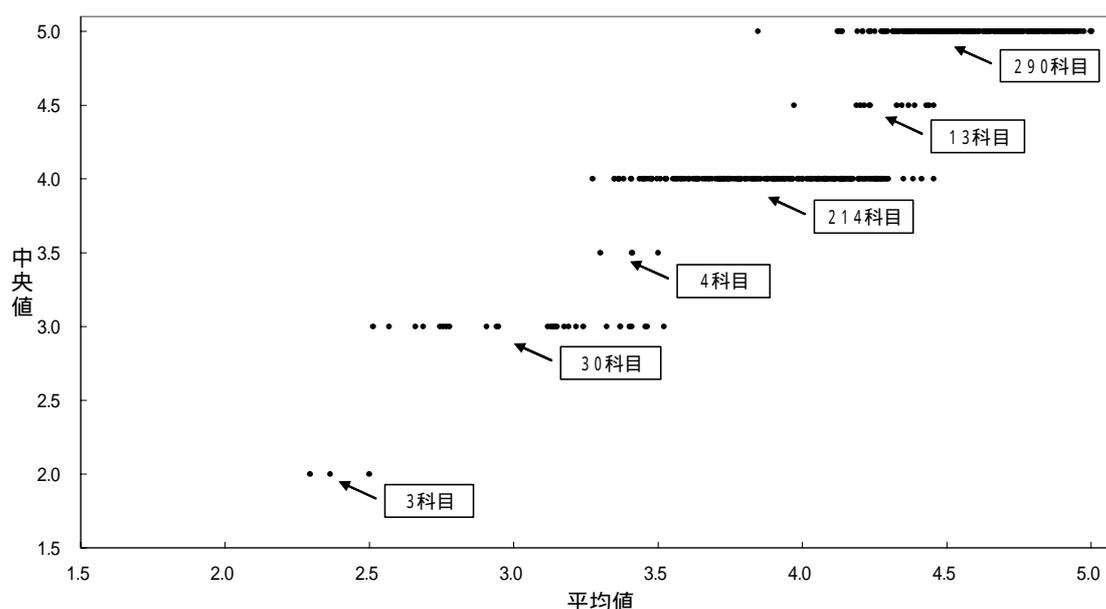
3 評定値の分析方法について

授業評価の評定値に関する分析には、これまで一貫して平均値を用いてきました。これは、5 段階評定を求めた場合、平均値でまとめることが一般的であるためです。しかし、どんなデータでも平均値でまとめることが適切というわけではありません。データの分布がお椀を伏せたような正規分布に近ければ、どのようなまとめ方をしても問題はありません。しかし、データの分布がゆがんでいる場合は、平均値よりも中央値（データを大きさの順に並べたときに中央に位置する値）などを用いるほうが望ましいとされています。

「私の授業では、両極端な評価をする受講生が多いので、平均値でまとめられては困る」「この種のデータを平均値でまとめることには問題がある」とい

ったご意見をいただくことがあります。科目ごとに授業評価結果を詳細に分析する際には、設問ごとの5段階評定値の分布も参考にしていますので、誤った解釈をしていることはないと考えていますが、今学期のデータで平均値と中央値の関係を分析してみました。ここでは、一例として、授業全体の満足度を問う設問18について平均値と中央値の関係を示しました(図3)。

図3 5段階評定の平均値と中央値の関係



電算処理された554科目のそれぞれの科目の平均値と中央値で決まる位置を図上に点としてプロットしたものです。なお、中央値で3.5や4.5がありますが、これは、回答者数が偶数の場合、ちょうど真ん中に位置する人がいないため、前後の2人の評定値の平均が中央値となるためです。たとえば、8人が「1, 2, 3, 3, 4, 5, 5, 5」と評定していた場合、4番目と5番目の評定値(3, 4)の平均を取って3.5を中央値とします。

平均値と中央値で1点以上の乖離が見られた科目が554科目中1科目ありました(平均値が3.85、中央値5)。この科目は、回答者数が少なく(13人)、かつ評価が分かれていたためですが(評定点5が7人、それ以外の評定点が6人)、ある程度の回答者数があれば、平均値を用いても中央値を用いても大きな違いはないといえます。むしろ、中央値を用いることで、多くの情報が失われるともいえます。授業評価結果の経年的変化を分析するためにも、今後も平均値を用いて授業評価結果をまとめていきたいと考えていますので、ご理解いただきたいと思います。なお、授業担当者には、回答者の評定段階別の頻度データ(「授業評価集計」)を授業評価用紙返却時に同封していますので、点検

・評価にあたり、参考にしてください。

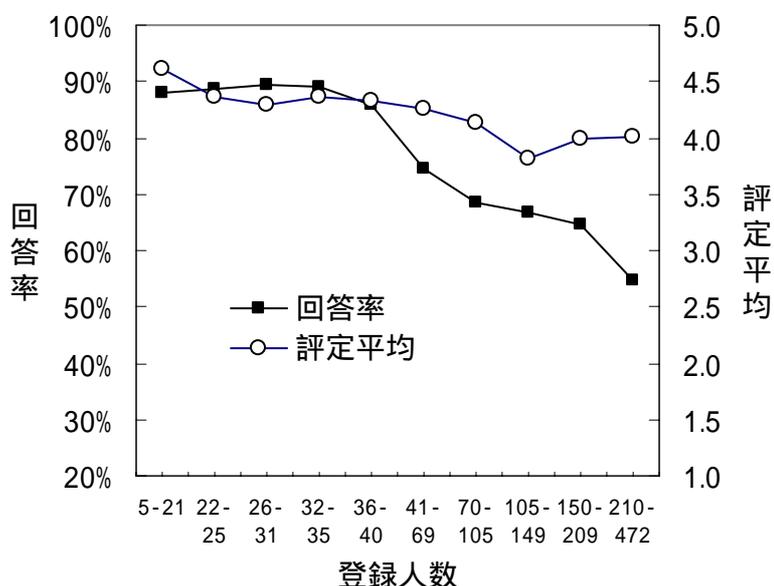
4 回答率

授業評価の実施方法については、毎学期少しずつ見直しをしています。教員が授業評価の実施に立ち会うかどうかも学期によって異なりましたが、ここ数学期、教員に教室に留まっていただくことをお願いしてきました。今学期は、その効果が現れたためか、全体の回収率がかなり向上しました。前学期の59.4%から今学期は66.2%となりました。的確な情報収集のためにも、回収率を高めることが重要と考えます。

回収率は、「必修科目か否か」「平常点（出席点）が成績評価に加味されるかどうか」「4年生の登録が多いかどうか」といった要因によって影響されると考えられますので、すべての科目を同列に扱うことはできません。しかし、回答率があまりにも低い科目については、何か特別な理由があるのかどうか確認する必要があると思います。

参考までに、電算処理された554科目を登録人数で10段階に分け（各段階に約10%の科目が含まれています）、登録人数群別の授業評価の回答率と評定平均（項目4から18）を図4に示しました。経験的に知られているように、登録人数が多くなるほど回答率が低下しています。しかし、2007年度秋学期の「学生による授業評価」のまとめで分析したように、回答者数が多くなっても評定平均が必ずしも低くなるというわけではありません。

図4 登録人数群別の回答率と評定平均



5 教員ごとの結果の見方

括弧のついていない頁番号のところは、教員ごとの結果です。本報告書では、原則として1頁に2件分の結果をまとめて表示しています。

それぞれ、次の要素からなっています。

科目名、教員名、休講・補講回数、回答率など 「回答率」は、登録人数のうち、実際の回答者数の割合を表しています。通常の調査と同様、回答率が極端に低い場合には、そのデータの信頼性に疑問が生じることになります。

レーダーチャート2種類 右下の図は、回答者全員の集計結果です。左上の図は、項目1から3の授業参加姿勢の評定平均値が、3.0以上の学生だけに絞って集計した結果です。

「授業評価結果を踏まえた点検・評価」 各教員が今回の授業評価結果を踏まえて書いた報告です。結果の自己点検・評価や、次学期に向けた改善策などが書かれています。

6 授業評価結果の活用

授業評価は、授業担当者が、自身の授業をよりよいものへと改善していくために役立つ情報を、学生の皆さんから収集するために行われています。

各授業担当者は、評価項目の評定平均値や、自由記述欄に書かれた「授業の良かった点」や「改善すべき点」を参考にして、自分の授業について点検・評価しています。授業を担当するすべての教員が、学生の皆さんの声を真摯に受け止めて授業改善に努力しています。

FD委員会では、一定の基準に合致した科目（高評価科目および低評価科目）について、授業評価用紙の裏面に書かれた自由記述欄を閲覧しています。これは、学生の皆さんがどのような授業を高く評価しているのか、また、授業運営上のどのような問題点の改善を望んでいるのかを明らかにするためです。

多くの受講生によって指摘されている授業の問題点や改善要望点については、FD委員会で検討した後、授業担当者と話し合いの機会をもち、改善に向けた具体的な方策を考えています。授業担当者に問題点に応じた研修を求める場合もあります。

高い評価を受けた科目では、どのような授業が展開されているのか、あるいは、どのような点が受講生から評価されているのかをまとめ、教員向けのFD関連Webページ内の、学内GP（優れた授業例紹介）のコーナーで公開しています。多くの授業担当者に、有効な教授方法や授業改善の手掛かりを提供するためです。

自由記述欄に書かれた授業環境（照明、空調、机・椅子、視聴覚機器、外の雑音など）に関する要望については、関係部署や自己点検・評価委員会で取り上げて、授業環境の整備に努めています。また、授業評価方法に関する意見については、FD委員会で取り上げて、授業評価方法の見直しに役立てています。

以上